

タイトル 『 在り処 』 作 相馬 杜宇

登場人物(男二人、女一人)

男

老婆

職員

0

初冬

静まり返った民家の居間。

舞台中央にコタツ、その上に目覚まし時計、周りに座布団が二つ。

上手前が台所、奥がトイレ、老婆の部屋に繋がる。

下手は玄関に繋がる。

正面奥には縁側、ガラス戸があり、外に通じている。

その他に上手の壁にタンス、棚、座布団の山など。

下手前方には小さな棚があり、その上に電話

物が雑然と広がっている室内。

男が縁側に現れる。よれよれのジャンパーに薄汚れたジーパンの出で立ちが存

在の胡散臭さを際立たせている。

ガラス戸から中を窺い、音を立てないように注意して入る。

誰もいないことを確認して、早速物色を開始

ぎこちない手付きから素人であることが分かる。

時折コタツがモゾモゾと動く。

しかし男は気づいていない。

男、棚からチャックのついた小物入れを取る。

開けてみると、そこには印鑑

印鑑を中に戻し、ポケットへ。

その時コタツの上の目覚ましが鳴る。

男、驚いた拍子に棚にあっただけん玉を足に落とす。

足を抱えて飛び跳ねながら、目覚ましを止めに行く男。

コタツから手が出てくる。

男、目覚ましを持ち、コタツから離れる。

まもなく老婆がコタツから顔を出す。

老婆 (嬉しそうに) おお……お帰り。

男 ……?

老婆 (出ようとしている) あら……よう……おっ……(手を伸ばし)……「めん」出
っ。

事態が飲み込めず、戸惑う男。

1

三十分後

何かを探している男と老婆。

男 ッたかどこにやったんだよ。

老婆 (通帳を手に取り) あった。

男 おっ。

老婆 ほら、第一勧銀。

男 そんな銀行、もうねえよ。

老婆 え、ないの？

男 ないよ、もっ。

老婆 (通帳を開き)……一二〇万。

男 え……(老婆から通帳を取り上げる)

老婆 (金額を指差し) ほら。

男 何だよ。

老婆 どうしたの。

男 一二〇万引き出して残り八十二円。

老婆 じゃあ今は八十二円……

男 びっくりせんなよ、全く。

老婆 何に使ったんだろっねえ……

男 これ、どこにあったの。

老婆 タンスの中だけ……

男 タンスか……

男、タンスの方へ。

老婆 ああ、一番上ね。悪いね、わざわざ来てくれたっのに。

男、タンスの一番上の段の中身を床にぶちまける。

老婆 あーあ、そんなに散らかして……

男 何言ってんだよ、(床に落ちていゝ示しながら)タオル靴下紙袋、パンツ鼻紙食べ
残し、散らかしてんのはどつちだ。
老婆 でもあたしは何週間もかかってこれだけど、お前は一瞬でこつたる？
男 だけど俺は……
老婆 もちろん通帳探して大義名分はあるにしろさあ、やり方が大胆というか、手荒
というか……そのタンス、空き巣に入られたみたいよ。
男 (動揺)はあ……？
老婆 八八八……何、その顔……
男 ……大丈夫、ちゃんと片付けるよ。
老婆 そう言つて片付けないのがお前だろ。
男 ……(床にぶちまけた物を物色している)
老婆 似るんだねえ、似なくていいのに……
男 ない……
老婆 あら、残念。
男 残念じゃないだろ。
老婆 あ、そうか……
男 ホントに覚えてないわけ？
老婆 いや、あるよ。
男 あるつてのは何回も聞いたよ。
老婆 ……
男 年金は？
老婆 その橋渡つたところね。
男 ……
老婆 あつたでしょ、郵便局。
男 郵便局か……
老婆 あそこ移つたら随分可愛くなつちやうって、一つしかないんだよ、窓口。
男 自分で取りに行つてんだ。
老婆 行つてくれるの？
男 行つてないの、今月？
老婆 行つたよ、先週。
男 じゃあ郵便局は大丈夫だな。
老婆 それがねえ……
男 取りに行つたんだろ、先週。
老婆 半年先だよ、問題は、潰されるでしょう、あのサイズは。
男 ……？
老婆 民営化でき。
男 ああ……
老婆 ああ……
男 街まで行くのかあ……
老婆 それより……
老婆 これも新しい未来のためだつて言つけど、明日をも知れぬ人間のこともちつとは

考えて欲しいよ。
男 そうだよ。
老婆 分かってくれる？
男 今を生きなくちゃ。
老婆 え？
男 (遮って)通帳は？
老婆 ……
男 思い出せるだろ、先週のことだし。
老婆 っ…
男 はい、年金を受け取って、郵便局を出ました。
老婆 出た…
男 この時通帳は？
老婆 あったと思うけど。
男 怪しいなあ。
老婆 忘れたら届けてくれるし。
男 あ、そっか。じゃあ出て、橋を渡って…
老婆 ちょっと待って。
男 何。
老婆 その前に、川を眺めたよ。
男 じゃあ川眺めて…
老婆 すごいの、鮭の帰省フッシュ、ありや乗車率百二十パーセントってとこだね。それ見て、うちの鮭も帰ってこないかななんて思ってたんだけど、そしたらホントに帰ってきくて…
男 いいから、そんなことは。
老婆 そんなこととは何だよ。あれはきつと…
男 (無視して)眺めたあとは？
老婆 ……帰ったよ、家に。
男 よし、家にはあるわけだな…
老婆 分かったところで一休みしようか。(立ちあがる)
男 何だよ。
老婆 先は長いよ、印鑑もあるし。
男 ああ…
老婆 印鑑ねえ…
男 見つかってもいいよな、一つくらい。
老婆 いや一つしかないよ。
男 え？
老婆 お前でしょ、まとめたの。何個もあると分かんなくなるだろか言って。
男 あの、チャック付いたやつ？
老婆 そうそう。
男 ……

老婆 さ、腹が減っては戦は出来ぬ……（立ち上がる）
男 いいよ、いいよ。
老婆 松屋の最中でも？
男 要らない、要らない、それより……
老婆 （酷く驚く）要らない……
男 ……？
老婆 どうしちゃったの？
男 いや、だって今は……
老婆 松屋の最中だよ。
男 まあ好きだけど、
老婆 お前サンタにも頼んだじゃない。
男 ……
老婆 食べるよね？
男 あ、じゃあ……
老婆 はいよ。（歌つ）パリッと軽やか心も弾む、松屋の最中も……

老婆、台所へ。

老婆 （声）ちよつど貰つてき、こないだ。
男 へえ……さっきの続きだけど、家帰つてきて……
老婆 （声）そんな急がなくてももいいじゃない。
男 何言つてんだよ、早く見つけないと。
老婆 （声）そうは言つたつて、一刻を争うわけじゃないだろ。
男 そんなのんびりしてられないんだよ。
老婆 （声）え、泊まるよね？
男 まさか。帰るよ、見つけたら。
老婆 ……
男 仕事で来たついでに、ちよつと寄つただけだし。
老婆 （声）仕事ねえ……
男 （自分の服装を気にして）あつ、その……実家いる時まで仕事引きずつてる感じ
もどろかと思つて……着替えたんだよ、駅のトイレで……
老婆 （声、無愛想に）コマ？ 栗？ あずき？
男 ……あずき。
老婆 （声）あずき？ ……好きだね、相変わらず。

少しの間

落ち着かない様子の男。

老婆、最中が乗った皿を持って、戻ってくる。はっきりと不満の色が見てとれる。

老婆 どうぞ。(「タツ」に置く)
男 家着いて、まず何した？
老婆 ……

老婆、床に落ちていたけん玉を手に取り、

老婆 これ、お前だよな。
男 話を逸らすな。

老婆 いいだろ、まだ……(けん玉の先端で男の足を突く)
男 良くないの。(老婆からけん玉を取り上げ、「タツ」に置く)
老婆 (男の靴下を示し)「これも良くないよ。」

男 あ？
老婆 穴。

男 (見て)「ああ……」
老婆 確かどうかに……(探そうとする)
男 いいってば。

老婆 みつともないでしょ、穴あきソックス。
男 後、後。

老婆 そう言ってるのを忘れるし……
男 (遮って)「通帳。」

老婆 ……
男 思いだして。玄関に入ったぞあ……

老婆 玄関から入ってないかもしれないし。
男 え、玄関じゃなかったら……？
老婆 縁側のこともあるんだよ、気分によって。

男 ……
老婆 元気の玄関、えんえん縁側。
男 えんえん？

老婆 (泣く真似をして)「えんえん。」
男 ああ……
老婆 食べなよ、どんどん。

男 うん。で、あの日は玄関？縁側？
老婆 今は縁側……
男 今じゃなくて……

老婆 駄目だ、駄目だ。
男 おい、
老婆 もつ見つからないって。

男 簡単に諦めんなよ。
老婆 (散らかった室内を見て)「だってこんなに探したんだよ。まだ望みはあるさ、タンスだってまだ真ん中と下は……」

老婆 見たよ、あたしが。
男 もう一度見てみないと……
老婆 まだ散らかすわけ？
男 上には第一勸銀がいたんだぞ……（中段もぶちまける）
老婆 もう好きにすれば。（立ち上がる）
男 どこ行くんだよ。
老婆 トイレ。

老婆、トイレへ向かう。途中縁側にある靴に気づき、

老婆 あれ、これ……？

男 あ……

老婆 お前も縁側の気分？

男 鍵忘れてと……

老婆 開いてただろ、玄関も。

男 いや、電気もついてないし、てっきりないのかと……

老婆 いたでしょ、ちゃんと。

男 誰が思っただよ、あんなところいるなんて。

老婆 ここ外から見えるでしょ。

男 （外を見て）……よく見えるな……

老婆 顔出して寝てたら間違われてさ、倒れてんだと。

男 ああ……

老婆 余計な心配掛けたくないし……持つてくよ、玄関（靴を取うつとする）

男 いいよ、自分でやるし。それより、いいのが、トイレ。

老婆 ああ、そうだ、そうだ。じゃあよろしく。

老婆、トイレへ。

男、それを見て、

男 畜生、あのババアどこにやったんだ……

男、さつきにも増して探し方が手荒

しかし肝心の通帳は見つからない。

コタツの最中を食へ始める。食へ方に苛立ちと焦りが感じられる。

まもなく口の動きが止まる。歯が痛い模様

痛いところを避けて食へようとするので、おのずと不自然な食へ方になる。

その時電話が鳴る。

最中を口に咥え、慌てて電話線を抜く。

老婆

誰え……？（と言いながら戻ってへる）

男とつさに電話から離れ、口に啜えている最中をゆっくり味わっているフリ。

老婆 こなかった、電話？

男 いや。

老婆 あれ……？

男 食べなよ、母さんも。

老婆 え？

男 ん、最中。

老婆 やめてよ、我慢してんだから。

男 何、いい年してダイエット？

老婆 ……？

男、残りの最中を口に押し込むと、縁側の靴を取る。

老婆 あ、あたしのもよろしく。

男、黙って老婆の靴も取り、玄関へ。

老婆 (電話を見て) おかしいなあ……

老婆、濡れた手をスポンで拭う。

その時、ポケットに何かを感じる。出してみると、それは正しく郵便局の通帳。

男 (声) 元気の玄関……

男が戻ってくるので、老婆は通帳をポケットに戻す。

男 (戻ってきて) えんえん縁側……

男、縁側の方向から部屋を眺め、何やら考える。

老婆 頑張るね。

男 人ごとかよ……

男、諦めたようで、部屋に入って物色の続き。

老婆、コタツのけん玉を手に取り、

老婆 (「もしかめ」の替え歌) もしも何処、通帳よお、我が家の中でお前ほどお、失くして困る物はないー、タンスの中にはありませんー。(最後まで続くことが望ましい)

が、もし途中で失敗しても、素早く誤魔化し、成功を装つ

男　おい……

老婆　やった、出来たよ。

男　やったじゃねえよ、早く言えよ、そういうことは。

老婆　ごめんね、忘れてて。

男　何、無いの、ここには。

老婆　無い、無い。

男　何だよ……

老婆　（けん玉を示し）よくやってたよね。

男　あ？　忘れたよ、そんなの……

老婆　（またやる）タンスの中にはありませんー（失敗）ああ、駄目だ、今度は……

男　いい加減にしろよ、見つける気あんのか、ホントに。

老婆　そんな大きい声出さないの。

男　……（外を気にする）

老婆　血圧上がるよ。

男　（声を潜めて）どうすんだよ、これから。

老婆　大丈夫だよ……お前もいるし。

男　だから帰るって、

老婆　（すかさず）見つかったらね。お茶入れてくるよ。

老婆、けん玉を床に投げ出し、台所へ。

男、散乱した物を見て、

男　ああっ汚ねえなあ。（老婆にゴミ袋ある？）

老婆　（声）あるよお。

男　この辺片付けるから、二、三枚……

老婆　（声）はいよっ……

台所から束になったゴミ袋が投げ出される。

男　二、三枚って言ったろ。

老婆　（声）いいの、いいの、どんどん使って。

男　……

男、室内に散乱した物を次々とゴミ袋の中へ入れていく。

かなりのハイペースで進んでいくが、途中不燃ゴミに行き当たり、やや考えて袋を分ける。

老婆、マグカップと湯飲みをお盆に載せて運んでくる。

老婆　おお、片付いたじゃない……

老婆、片付いた室内に気を取られ、けん玉に一直線
男、きりぎりるところでそれに気づき、

男 危ないっ……

男、左手にけん玉、右手にお盆、妙な体勢になってしまい、かなり苦しそう。

老婆 え？

これ……（お盆を受け取るように促す）

男 （けん玉に気づき）ああ、これが……（けん玉を受け取る）

男 （バランスを崩し）あっ……あっ……（何とかお盆をコタツに置き）こっちだろ、

普通

ありがとう。自分で置いたのにね、何やってんだか……（けん玉をコタツに置く）
気をつけるよ、全く……はい。（湯飲みを差し出す）

老婆 ん？

どうしたの、はい。

男 そっちでしょ。

老婆 え。

あたしのはマグカップ（マグカップを手取る）……いつだったっけ。

男 ……

これ、買ってくれたの。

老婆 ああ、俺が買ってやったのか。

男 そうだよ、取っ手が付いてる方がいいだろうって。

老婆 そうだよ、そうだ。……いや随分前だったからさ。

老婆 そんな昔でもないよ。

男 そうかなあ。

老婆 ちよつと、ボケるには早すぎるんじゃない。

男 八八八……

老婆 （不燃ゴミの袋を見て）こっちが捨てるの？

男 それ燃えないの、隣が燃えるの……

老婆 え、じゃあどつちも捨てるわけ？

男 （可燃ゴミの袋からフリーペーパーを取り出し）要らないだろ、こんなの。

老婆 駄目、それ、載ってんだよ、あたし。

男 どれ。

老婆 （見ずに前の列の右から二番目。

男 ……分かんないよ、小さくて。

老婆 分かるって、よく見れば。

男 （数珠）じゃあこれは？

老婆 ありがとうだよ。

男 もしかして、サンゴ？
 老婆 まさか、安かったし。
 男 何だよ……
 老婆 でもそれ買ってから調子がいいの。ほら……（腕を伸ばして見せる）
 男 胡散臭えなあ……（手袋ならこれは？）
 老婆 可愛いじゃない、ウサギさん。
 男 でも穴開いてるし。（指を入れて見せる）
 老婆 使えるよ、直せば。
 男 くそ……
 老婆 意味あるんだよ、ちゃんど。
 男 そんなこと言ったら片付かないだろ、ちつとも。
 老婆 いいじゃない、捨てるのはいつでも出来るんだし。
 男 いつでもと言ってるうちはいつまでも、残り続けるガラクタの山。
 老婆 お、短歌だね……だけでもさ靴下を取り（こんな可愛いく、数珠を取り）あらた
 かな それも捨てえはただの燃えカス。
 男 もう帰るぞ。
 老婆 え、何で？
 男 これじゃ見つかるもんも見つからねえよ。
 老婆 簡単に諦めるなよまだ早い、無いはずはないきつとどこかに。
 男 よく言つよ。
 老婆 あたしも協力するからさ。
 男 当たり前だろ、誰のだと思ってるんだ。（水玉の帽子を見つけ）これはいいだろ。
 老婆 え、それは……
 男 水玉だよ、水玉。こんなの被って歩けるかよ。
 老婆 それ和美ちゃんのですよ。
 男 え？
 老婆 忘れてったの、来た時に。
 男 ああ……（帽子をコタツの上に置く）
 老婆 ちよつと、しつかりしてよ、お父さん。はい。（帽子を男に渡そうとする）
 男 いや俺に渡されても……
 老婆 持って帰ってよ、ここにあってたつてあれだし。
 男 ……（受け取り、ポケットに仕舞つ）
 老婆 まあ、もうそんなの被る歳じゃないか。
 男 ……
 老婆 しばらく会ってないけど、大きくなったでしょ？
 男 そりゃ……
 老婆 今……中学……？
 男 そつそつ。

少しの間

老婆 あれ、でも、年賀状じゃランドセル背負ってたような……

男 え……いつの話だよ。

老婆 じゃあ中学か……

男 そう中学……

老婆 もうそんなになるんだあ……

男 私立だから金掛かって大変だよ。

老婆 そんなに？

男 寄付金一五〇万だよ。

老婆 一五〇万か……

男 借金して寄付するなんておかしな話だろ。

老婆 ……出してあげてもいいよ。

男 あるの。

老婆 あるよ、それくらい。

男 そうか、あるんだ。いやあ助かるよ、それは……

老婆 でもそのためには見つけないと……

男 見つけるよ、何としても。

老婆 良かったあ……約束ね。(小指を出す)

男 あ、うん……(指ぎりの形になる)

老婆 ゆびぎりげんまん、嘘ついたら針千本のおます。

男 じゃ母さんの部屋、探してくるね。(立ち上がる)

老婆 え、お茶ぐらい飲んでいきなよ。

男 鉄は熱いうちに打たないと。

老婆 え？

男 さっきの約束、忘れないですよ。

老婆 まあお茶も熱いうちに……

男 行ってしまふ。

老婆、けん玉を手に取り、

老婆 (声を潜めて)母さんの部屋にもありませんー……(けん玉の成功如何に関わらず)

成功……

老婆、けん玉をコタツに置く。

最中を手に取り、しばし考えた末、食べる。

ポケットから通帳を取りだし、

老婆 一、十、百、千、万、十万、百万……一、十、百、千、万、十万、百万……しか
も使われては……うん、いない。よし……(再びポケットに入れる)

少しの間。

老婆 どう、見つかったあ？（また最中を食べる）

男 （声）まだ、これから……

老婆 ま、そう簡単には見つからないか。

男 （声）大丈夫、見つけるよ……

老婆 うん、よろしく。あのさ、そっちに黒い入れ物があるたる。

男 （声）どんなの。

老婆 だから黒いの、そんな大きいのじゃなくて。

男 （声）……ポーチ？

老婆 そう、それ。持ってきてくれる？

その時玄関のチャイム。

老婆 はい。

老婆、玄関へ向かおうとする。

慌てて戻ってくる男。手には黒いポーチ。

男 待って。

老婆 何。

男 誰。

老婆 分かんないよ、チャイムしか聞いてないし。

再びチャイム。

老婆 今行きまーす。

男 おい。

老婆 何よ、さつきから。

男 はい、これ。（ポーチを渡す）

老婆 あ、ありがとう。

男 ま、ま、座って。（老婆を半ば強引に座らせる）

老婆 どうすんの……？

男 せっかくの親子水入らずなんだぞ、どごその馬の骨に邪魔されてたまるかよ。

玄関で「入るよ、ばあちゃん」の声。

咄嗟に台所に隠れる男。

まもなく職員がズカズカと入ってくる。新米の臭いがプンプンする二十台半ば。

老婆 おお、いらっしやい。

職員 良かった、無事で……
老婆 え、何で？
職員 電話繋がらないんだもん、心配したよ……
老婆 あら、じゃあやっぱりあの時……ん？（思っていたところに男がいない）
職員 誰かいるの？
老婆 息子。
職員 帰ってきたんだ。
老婆 （台所に向かって）ほら、シャイなオヤジ取ってないで、こっち来て挨拶しなさいよ。

男、 気まずそうに出てきて、

男 どうも……
職員 初めまして。
男 あの、こちらは……？
老婆 孫、孫。
男 ……
職員 嬉しいなあ、そう言ってもらえると。
老婆 孫だよ、もう。
職員 この辺の孫役を仰せつかっております。
男 あ、役場か何かの……？
職員 スバリそれ、地域福祉課。お仕事ですか、今日は。
男 ええ、まあ……
職員 こんな鄙びたところにねえ……（電話の方へ）
男 ……
職員 いや、勿論大歓迎ですけど。
老婆 良かった、賑やかになって……（座布団の山から二つ持ってくる）
男 ハハハッ。
職員 （電話を見て）あ、やっぱりそつだ……
老婆 やっぱり？
職員 抜けてるよ、電話線
老婆 あら。
男 多分探してた時に……
老婆 そつだね、きつと……
職員 （がらりと変わり）何考えてんですか。
男 何って……
職員 電話線って言うたら、独居老人のライフラインですよ。そんな自由に出歩けるわけじゃないんですから、人と繋がるチャンスの大半は必然的に電話でしょう。この無機質な機械に向かって「元気にしてる？」とか「お小遣いあげるから遊びにおいでよ」とか語りかける姿を想像してみてくださいよ。何と惨めなことか、何と切ないことか。け

どそれにもささやかな喜びを見出して、生きる活力にしているんです。それに具合悪くな
って救急車呼ぶことだってありますよ。けど電話する気力はあっても、電話線挿し直す
力はそうそうあるもんじゃないでしょう。(電話線を挿し直す) 具合、悪いんですから。
もちろん掛けるだけじゃない、掛かってくることだってあります。

男 分かったよ、もう……

職員 何探してたんだか知りませんが、多分大したものじゃないでしょう、

男 いやそりゃ……

職員 うっかり、外してしまっなんて……うっかりじゃ済まされませんよ。

老婆 通帳だよ。

職員 通帳？

老婆 どこやったか忘れちゃって……

職員 あ、それは……

男 大したもんだろ。

職員 威張ることじゃないでしょう、抜いたんだから、あなた。

男 ……

職員 頼みますよ、ホント……

職員、台所へ。

男 何なんだ、あいつ……

老婆 燃えてんだよ。

男 何に。

老婆 福祉でしょ。

職員 (声) 正しくは地域福祉ね。

老婆 だって。

職員 (声) 今夜は芋の煮っ転がしですか。

老婆 そうそう。

男 これも福祉？

老婆 まあ現状を知るといっつか……

職員 (声) 芋の煮っ転がしかあ……

老婆 食べる？

職員 (すかさず) もちろん。

男 味まで知る必要あるのかよ。

老婆 好きなのよ、あの子。お前も食べるよね。(と言って立ち上がる)

職員 (戻ってきて) あ、そのまま。火は点けてきたんで。

老婆 ああ、そう。(座る)

男 早い仕事で。

職員 ありがとうございます。

男 ……

職員 お客のニーズを先に読む、これってサービスの基本ですよね。

男 ん……？

職員 税金で食わせてもらってる身として、やはりいろいろとサービスで住民に還元していかないと……

男 食べるんだろ、芋の煮っ転がし。

職員 そこはギブアンドテイクで。

男 そもそも、温めんのはあんたが食つためだろ。

老婆 いいじゃない、そんなの。

職員 美味しかったよ、冷めたままでも。

老婆 食べたの？

職員 ちよっとね。

老婆 温めたらもつと美味しいよ。

職員 楽しみだなあ……お、松屋の最中。

老婆 食べてよ、どんどん。

職員 やったあ。(手に取る)

老婆 その前に。

職員 あ……せーの。

老婆・職員 (歌う) パリッと軽やか心も弾む、松屋の最中あ。

職員 ハモったね、今。

老婆 ホント？

職員 (男に) そう思いませんか？

男 え……んー……

老婆 何だよ、ノリが悪いねえ。

職員 いただきますあす。(食べる)

老婆 あ、お茶……

職員 やるやる。

男 いいよ、座ってるよ、客人は。

男、お盆を持って、逃げるように台所へ。

職員 良かったじゃん、帰ってきて。

老婆 でも今日のうちには帰るって言っただよ。

職員 え、今日？

老婆 うん、さっき来たばかりなのに。

男 (声) お茶っば、お茶っば……

職員 あ、左の棚にあります。それと、急須はまな板の横です。

男 ……

職員 気をつけて下さいよ、古いのと新しいのとありますから……大丈夫かなあ……

老婆 まあ新しいの開けても……

職員 駄目。そうやって湿度らせたでしょ。
老婆 ああ、そっか……(台所に回かって駄目だよ、新しいの開けたら、丸聞こえだから、そっちの話)

と言いながら男、お茶を持って戻る。お盆の上には湯飲み。

職員 ご苦労様です。

老婆 (お盆から湯飲みを取って) はい、どござ……あっ……(お茶を覆す)

職員、台所へ。

呆気にとられ、ただ見ている男。

職員、台拭きを持って戻ってきて、

職員 大丈夫？

老婆 (立って)……うん、コタツだけ。ごめんね。

職員 気をつけてよー……

職員、濡れたところを拭く。

電話が鳴る。

老婆が出る。

老婆 もしもし……え……ああ、元気だよ……うん、この間は……うん……ご……
男 ちょっと待ってね。(男に)どござ……とだるらつね。

男 ……

老婆 あたしのこと母さんって。

男 母さん……

老婆 あれかな、噂の。

職員 あ、オレオレ。

老婆 そうそつ。

男 そうだよ、きつと。

老婆 でも腰悪いの知ってたよ。

職員 あれ……

老婆 心配までしてくれまし。

職員 じゃあ本物？

老婆 いるじゃない、ニコニコ。

職員 そうだよなあ……

男 腰悪い年寄りなんて珍しくないって。

老婆 ああ、確かに。

男 早く切つちまえよ、そんなの。

老婆 でもお金の話してなかったよ。

職員 これから話すつもりなんじゃ……
老婆 (電話口の相手に) もしもし、今息子に代わります。
男 いいよ、代わらなくて。
老婆 お前が出れば、話が早いでしょ。
職員 そつですよ、ガツンと言ってください。
男 「息子はここにいますから」って言えばいいことだろ。
老婆 もう代わるって言っちゃったし、はい。(受話器を男に渡す)
男 …… (意を決して) 今ね、捜してるんですよ、通帳。ほら母さんが無くしちゃって。だから、振り込めませんよ、事故だろうと、病気だろうと、中国マフィアだろうとね。だつて無いわけですから。他当たってください、はい失礼します。(切る)
老婆 やっぱり金送れって？
男 先回りして言ってやったんだよ。
老婆 あ、なるほど……
職員 オレオレかあ……初めてだよ、遭遇したの。
老婆 おお、良かったね。
男 (自分に言い聞かせ、歌う) オレオレオレオレ……
職員 いやあ、見直しましたよ。
男 ……
職員 話を聞いちゃうから駄目なんですね……他の家にも教えてあげなくちゃ。
男 やめるよ、そんなの……
老婆 お疲れ様。まあ、座って休んで。
男 休んでる場合じゃないよ。

男、 搜索を再開。

職員 いる間に見つけようつてわけですか。そのためなら休む間も惜しんでねえ……素敵だなあ、親子愛。
老婆 帰れないんだよ、見つけないと。
職員 そつなの？
老婆 約束だし、ね？
男 見つけるって……
職員 (老婆に) あれ、通帳でしょ？
老婆 郵便局ね。
職員 やっぱり。
老婆 え？
職員 この前はスポンの中入ってたよね。
老婆 (やや動揺し) ああ……
男 見て、スポン。
老婆 見たよ、最初に。
男 ……

老婆 さすがに同じへマはしないって……
男 もしかして……

男、老婆の部屋へ向かう。
これ以降の会話の間に救急車が近づいてくる。

職員 行っちゃったよ。
老婆 戻ってくるさ、そのうち。

老婆、立ち上がり、何やら探します。

職員 また失くしたわけ？
老婆 これは違うんだけど……
職員 何が違うのさ。
老婆 ん？ これは……
職員 どこだ、今度は……（探そうとする）
老婆 いいよ、探さなくて。
職員 どうして。

老婆 どうせすぐ見つかるし。
職員 何で分かるの。
老婆 実はさ……（スポンから通帳を出し）あるんだよ、ここに。
職員 え、じゃあ……
老婆 見つかったら帰っちゃおうし。
職員 ああ……

老婆 今夜くらいは泊まって欲しくてさ……あ、このことは内緒ね。
職員 正直に言ってみたら？
老婆 何を？
職員 泊まってほしいって。
老婆 言ったさ。それで首縦に振るなら苦労しないだろう。
職員 そっか……

老婆 ホントはこんなことしたくないんだけど……（スポンに戻る）
職員 大人しく泊まればいいのにね。
老婆 そうだよ、あのガンコめ。（床の物を取るとした拍子に）アタタ……
職員 大丈夫？

老婆 何、ちよっと……
職員 行ってる、病院？
老婆 うん、明日だよ、ちよっど……
職員 明日？

老婆 第四週でしょ。
職員 土曜って休みじゃないの、県立？

老婆 あれ、今日って……？

職員 金曜

老婆 ありゃ、じゃあ……

職員 今からでも……

老婆 やってないでしょ、もう夕方だもん。

職員 うーん……

老婆 大丈夫、来週行くし。

職員 今度は忘れないようにしなよ。

救急車が家を通り過ぎ、まもなく停まる。

老婆 おっ近いんじゃない、これは。

老婆、職員、縁側のガラス戸から救急車の行方を見つめる。
少し遅れて、沢山のズボンを抱えた男も来る。

職員 (ガラス戸を開けて身を乗り出し)……伊勢崎さんだよ。

老婆 (男に) あら、タカちゃんち。

……

老婆 お前しょっちゅう泣かせてたじゃない。

男 (いかにも分かったふう) ああ、あの泣き虫が……

老婆 奥さんか、旦那さんか……ひょっとして、

行く？

職員 もちろん。(男に) べつする……

老婆 残るよ、俺は。

男 薄情だねえ、タカちゃんかもしれないよ。

老婆 ー、でも……

職員 (ズボンの山を見て) 何ですか、それ。

男 ズボン。見りゃ分かんたる。

老婆 なるほどね……行こっか。

職員 うん。

続く